
蝉時雨が鳴いている。

如月 コウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蝉時雨が鳴いている。

【Zコード】

Z9571A

【作者名】

如月 ハウ

【あらすじ】

小学生最後の夏休み。蝉時雨が鳴り響く中、少年と少田舎に遊びに来ていた顔馴染み少女は、少女が住んでいる街へと帰るまでの僅かな時間を共に過ごす……。

蝉時雨が鳴いている。

肌をじりじりと焼く、照りつける太陽の光よりも焦がれる。

君のその柔らかな手に、僕の手を重ねる手段が思いつかないまま。いつもの坂道。並ぶ影一つ。

その笑顔を壊したくなくて。今ままの関係で在りたくて。それでも特別になりたくて。

この感情の名など知らぬまま。

意を決して差し出された僕の手は。

離し立てるかのように、響き渡る蝉の合唱に負けて、虚空を掴む。そして今年も変わらない。

変われなかつた夏が 終わる。

「あつちゃん。あたしは明日で帰つちやうけど…また来年も来てもいいかなあ？」

「…なんで僕にそんな事聞くんだよ」

小学生最後の夏休みも終わりに近づき、帰郷先のこの田舎で帰宅の準備を進める顔馴染みの手伝いをしていた最中。親から任された仕事がひと段落ついたので、縁側で扇風機を回して涼んでいる僕に声がかかったのだ。

恥ずかしいから止めないと言つていてはすの、子供っぽい呼び名で僕を呼ぶ奈菜が、そのビー玉のように大きな瞳のまま首を傾げながら、表情を伺つような声で。

「だつて…。あつちゃん、いつもあたしと居る時不機嫌そ…」

「別に。そんな事無い」

この不機嫌さの理由なんて分からない。

さつき降つた通り雨のせいで上昇した、肌に纏わりつくよつた湿気

のせいかも知れない。

或いは物知りなおばあちゃんが教えてくれた、この暑さを増幅されるように鳴き続ける蝉達の、蝉時雨といつもののせいかも知れない。だが本当の原因はなんとなくだが、僕は理解していた。

奈菜がまた、こんな田舎では考えられないような程に便利な都会と、いつ街に帰るんだと思つと、無性に腹が立つのだ。

それはもしかしたら、一度奈菜が帰ってきた時に迎える僕の誕生日に、この村では僕が望んでも到底手に入らないような玩具を、プレゼントとして毎回手渡される事への言い知れぬ敗北感からくるものかも知れない。

なにより。

いつだつて、都会で過ごしたその綺麗で柔らかそうな奈菜の手は、田舎で過ごした僕のような泥だらけの手を拒んでいるように見えて、とても嫌だった。

「じゃあどうして?」

「教えない」

「教えないって事は、やつぱり怒つてるんだ…」

「……………あ」

思わず口をついて出でてしまった僕の想いの欠片に、奈菜が気づいてしまった。

『しまつた』と慌てて口を噤んだが…時すでに遅し。

奈菜はその頬を盛大に膨らませて、不機嫌そうにそっぽを向いた。

「なあ」

「返事ぐらこじりよ」

「……………あつちやんとは口も聞きたくないもん」

「……………」

「……………」

「奈菜」

「……………何?」

口も聞きたくもないと宣言しておきながら、一呼吸置いて名前を呼べば、簡単に言葉を返す奈菜がおかしくて、僕は思わず笑ってしまう。

「むうー…あつちゃんなんて大つ嫌い！」

それが余程気に入らなかつたらしく、頭にかぶつていたお気に入りの麦藁帽子を僕の顔面に叩きつけ、奈菜が家の前の坂道を下つていく。

何処に行くのかと、縁側から障害物などなく見えるその後ろ姿を静観していると…。

「…………」

ピタリと、坂の途中まで降りた辺りで、奈菜がその足を止める。そしてそのまま様子を伺つのように、ゆっくりとこちらに視線を送つてきた。

訳が分からず、困惑顔の僕。幸い、あの距離なら互いの表情までは見えていない。とりあえず大きく手を振つてみると、すると今度は

「あつちゃんの馬鹿あ~~~~~」

なんと大声を上げてその場で泣き出したではないか。
さすがにその声に大人達も気づいたらしく、『篤！^{あつし}…また奈菜ちゃん泣かせたんか』と怒鳴る母親の姿が見える。

僕はその声に弾き出されるような形で、慌てて逃げるように奈菜の後を追つて坂道を下つた。

「…………奈菜？」

「えへ～…………」

駆け寄ってきた僕を見て安心したのか、奈菜は涙目ながらに笑つてみせる。

そのビー玉のように大きくて綺麗な瞳が、涙に反射した太陽の光でキラキラ輝いていた。

なぜか恥ずかしさを感じた僕は、どうも先程から奈菜の思い通り

に事が進んでしまったような気がして、顰め面のまま目を逸らす。

「ふえ……」

「ちょ、ちょっと待ってくれよ！…どうしてそこで泣くんだよー…？」

「だってあっちゃん、あたしの事見たくなぐらいに怒ってるう…」

僕の少し大きくなってしまった声に少し目を潤ませながらもそこまでなんとか言い切ると、奈菜は溢れ出でてくる涙を拭いながら、今度はしゃくりあげるようにすすり泣く。

「怒つてない！怒つてないってばー…！」

もうお手上げだと言わんばかりに頭を搔くと、僕は俯いた奈菜の涙を拭っている左手首を、涙を拭えなくするために利き手である右手で思いっきり掴み、左上へと引っ張りあげる。

そして

「いい加減にしろよー！」

思わず目を瞑りながら俯き、力の限り怒鳴りつけていた。

意味不明なモヤモヤ感に苛まれ、いつの間にか不快感を募らせている僕。

だが、その原因であるはずの奈菜はこつして好き勝手に感情を爆発させて、その結果、こつしてお守りをさせられている事への理不尽さへの不満さえも、その声に乗せて僕は怒鳴った。

「…………あ」

言い終えて、僕は再び『しまった』と思つた。

こんな風に怒鳴ってしまえば、奈菜はますます泣き出してしまつ。

慌てて弁解しようと、奈菜へと視線を戻そうとした瞬間

「綺麗……」

嬉しそうに呟く奈菜の声が聞こえた。

呆然としつつも、顔を上げて奈菜の視線の先を見てみる。

そこには、僕が奈菜の手首を掴んでそのまま突き上げた手の先にあ

る綺麗な虹。

そこにある不思議な光景に、思わず僕も田を奪われてしまつ。

「あつちゃん、とっても綺麗だよねー！」

泣いたカラスがまた笑う。

まだ少し残る田の端にある雲を拭おうともせずに、満面の笑みで僕に笑いかけてきた。

「知らないよー！」

その笑みを見て、僕の胸はとてもざわつく。

そしてそれを表すかのように、いつか聞いた蝉達の合唱が鳴り響く。ただあの時と違うのは僕の手の在り方。

高々と掲げられた僕の手には、いつの間にか綺麗で柔らかそうな奈菜の手が重なつている。

「えへー」

重なつた手に送られている僕の視線に気がついたのか。

奈菜は虹を見ていた時と同じぐらいに、眩しい笑顔で奈菜が再び笑う。

「なあ？ 奈菜」

「うん？」

「……また来年も来いよ」

「…………うんっ！」

その笑顔をわざわざ崩すのはなんだか忍びなくて。

僕はその手を離す事無く、重なつた手のひらの先にある虹をいつまでも見ていた。

蝉時雨が鳴いている。

僕の心臓の音よりも遙かに小さい。
控えめな、にわか雨のように。

【END】

後書き

このような駄文を最後まで読んで下さり、まことにありがとうございました。

もし宜しければ、この作品へのご意見・ご感想をお願い致します。

如月自身、短編というものは執筆するにあたってとても苦手な部類にありまして、今回も思い立つてから少々時間が経ってしまってお恥ずかしい限りであります。

しかし、試行錯誤ではございましたが、多少は良い作品に仕上げられたのではないかと、如月的には勝手に思い込んでおります。

子供の頃、下らない事に優劣をつけ勝手に怒つたりした記憶はありますでしょうか？

それが好意を寄せる相手であつたのなら…あなたはどうしていたでしょうか？

この作品を読んで、そんな昔の自分を少しでも思い出しても、苦笑いのひとつでも浮かべて下さった方が一人でもいらっしゃったのなら。この作品は本懐を遂げた事となるでしょう。

それではこれを読んで下さった皆様が、少しでも心が休まる時を過ごせる事を願いまして。

如月コウでした（礼）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9571a/>

蝉時雨が鳴いている。

2010年10月14日23時41分発行